

## かくちだ 角地田遺跡

(糸魚川市大字小見字木ノ下132-1ほか)

角地田遺跡は、能生川左岸の扇状地に位置し、標高は30～34mを測ります。北陸新幹線建設に先立ち、5月から8月までの4か月で、面積2,135㎡を調査しました。その結果、古代の遺構・遺物と中世の遺物を検出しました。

遺構は、<sup>ほったてばしらたてもの</sup>掘立柱建物、<sup>うねしょういこう</sup>畝状遺構、<sup>はいせき</sup>配石遺構、土坑、溝、自然流路等を検出しました。掘立柱建物は現在まで9棟見つかり、規模は1間×2間～3間×5間までのものが確認できます。畝状遺構は畑の耕作跡と考えられている遺構で、十条ほどがほぼ平行するように並んでいます。

遺物は、古代では土師器の椀・甕・銅や須恵器の杯・甕・壺が出土し、中世の遺物も珠洲焼等が出土しています。また、<sup>ぼくしよどき</sup>墨書土器や<sup>せいえんどき</sup>製塩土器も出土しました。

墨書土器には口縁部に「臣」の文字があり、遺跡付近の地名「小見」に相通ずるものがあります。製塩土器は塩を得るために海水を煮沸した土器とされています。その他、漁撈の網錘として用いる管状土錘や鉄滓・羽口等の鍛冶に関連する遺物も見つかりました。これらの点から、本遺跡では畑作・漁撈・製塩・鍛冶の様々な生業を営んでいたと考えられます。



掘立柱建物

## ぜん なみ みなみ 前波南遺跡

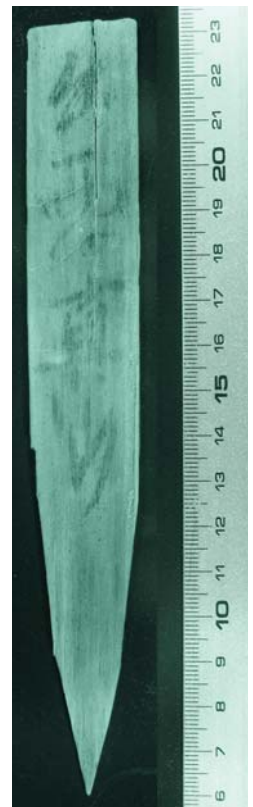
(糸魚川市大字大和川字前波)

前波南遺跡は一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成18年度から発掘調査を行っています。海岸砂丘と丘陵間の沖積低地に立地し、昨年度の調査の結果、古墳時代中期と奈良時代を中心とする遺跡であることがわかっています。今年度は昨年度の調査区の南側、約1,300㎡を対象に調査を実施し、8月に調査を終了しました。

検出された遺構は、溝1条、ピット十数基のほか、旧流路2条、不整形な溝状の浅い落ち込みが数条です。この浅い落ち込みは自然に形成された可能性もありますが、底面が踏み荒されたようになっていることや、南東-北西方向に長軸をもつなどの共通性があります。調査区中央の旧流路からは、土器はほとんど出土せず、伐採や枝打ち痕跡がある自然木を何本も検出しました。西側から流れる溝はこの旧流路に流れ込み、合流付近から古代の可能性のある木簡や田下駄が出土しています。木簡には「出雲真山」と墨書きされており、人名ではないかと推測しています。調査区東側の旧流路からは杭状・棒状・板状などの加工材が多量に出土しました。一緒に出土した土器から、大半が古墳時代の木製品と考えています。この木製品は意図的に集積されたものか、洪水などの流れ込みによるものか、今後検討する必要があります。また同じ旧流路からは、古墳時代の<sup>うすだま</sup>臼玉・<sup>くだたま</sup>管玉・<sup>まがたま</sup>勾玉の成品・未成品が十数点出土しています。

今年度の調査範囲は集落の居住域ではありませんでしたが、古代や古墳時代における低地や河川の利用方法の一端を窺うことができます。

(石川智紀)



木簡